

【選評】

ビルメンテナンスという職業に感動あり

選考委員長 興膳 慶三

今回の懸賞作品大賞は、『印象を築く仕事、ビルメンテナンス』と題する高校生・岡部達美さんの作品に決定しました。題名にあるとおり、ビルメンテナンスという仕事の最も重要と思われる特性・意義（「印象を築く」）のひとつをよく捉えています。ただ、このテーマへの主張が、自ら父に協力してきた「仕事場」と「トイレ」のお掃除の中には、一貫して表現されていないうらみがあります。本人の父への協力が「気持ちよくお仕事をしよう」ことではあっても、来客に良い印象を与えることを通して父への協力を果たすという主題へのアプローチがやや弱いと感じざるを得ないのであります。印象を創り上げるお掃除の大事さを、一般の家から気づかされるのではなく、お父さんの仕事場である「相談室」や「トイレ」から気づかされて欲しかったと思います。それから蛇足ですが、「トイレの神様」を持ち出さなくても、読者は著者の立ち居振る舞いで、それを十分感じ取ることができたであろうと思います。大賞であるだけに、少し厳しい目になりましたが、全体的には、テーマへのアプローチの視点を変えながら、お掃除からビルメンテナンス全体への展開を図るなど、視野の広さや知識取得への努力の跡がうかがえますし、何よりも本人の温かく、優しい眼差しを強く感じさせてくれました。

優秀賞は、創作『落札スラプスティック』と題した大川美絵子さんの作品に決定しました。経営環境がますます厳しくなる中で、業界が最も神経質になっている「入札」を題材に取り、スラプスティック・コメディ（作者の意を汲んでいないかもしれませんが読者のために取り

敢えず「ドタバタ喜劇」と訳しておきます。無声映画時代のチャップリンやキートンを連想していただくのが最も近いと思われます）に仕上げようとした作者の意図に拍手を送りたいと思います。喜劇は、登場人物のバカバカしいほどの真剣さがあればあるほどおもしろくもなり、涙を誘うものであります。クレーム発生に「だからウチみたいな小さな会社には、速友物産みたいな所は無理だったんだあ」というこの会社の謙虚さと、従業員の採用、教育、資機材搬入など、業務の立ち上げへの取り組みの真剣さなどが、バックグラウンドにあって始めて、この作品のおもしろさが出てくるのであろうと考えられます。言葉の使い方や文章の構成などにやや粗さは目立つものの、11枚の短い作品ながら落札から仕事の立ち上げへの展開、登場人物の性格づけもしっかりしていて情景が鮮やかに浮かび上がってきます。欲を言えば、現場にもう一人特徴の人物が居て、クレーム対応にもう一つ違ったおもしろさを加味すれば、より一層のドタバタが進行したように感じられました。

この他、佳作数点の中にも、たいへん味わい深い作品が寄せられました。ただし残念なのは、ビルメンテナンスの未来であるとか、課題であるとかの正面切った論説が少なかったことです。東日本大震災を体験する中で、目先の難しさも加わり、ビルメンテナンスの過去を総括するだけでは出てこない未来が、この課題への取り組みをより一層難しくしているのかもしれない。わずかに、瀬川豊氏の『清掃の社会的評価を根本から向上させるには』と松岡浩史氏の『ビル設備管理技能士制度の現状と

活用及び普及に関する考察』の2編が佳作に入選しました。

瀬川氏の一文は、経費節減と品質向上を目的としたはずの競争入札が今や価格競争だけに収斂し、それが従業員の技術をも疲弊させる結果に陥っている現状に対して、清掃の意義を広く社会に知ってもらい、社会に開かれた教育制度を確立することを提案しています。また、松岡氏は、ビル設備管理技能士制度に焦点を絞り、ビルメンテナンスの技術向上にとってたいへん価値ある制度が、広がりやを失っている現状に関して、業界側と主催側双方から原因を分析、技能士にメリットを付ける改革努力を要求しています。そして最後に、ビルクリーニングとビル設備管理の両技能士の一体化を提言しています。奇しくも、両作品は教育を課題とし、それを通して業界固有技術の質的向上を提言しております。全国ビルメンテナンス協会にも突きつけられた課題のように感じられて仕方ありません。

もう一つ、注目されたのは、この業界で働く人たちの職業意識について、多くの作品が寄せられたことです。ビルメンテナンスに働く人たちの中に若者が入ってきたこと、そして従来からビルメンの強固な労働力基盤である「おばちゃん」たちの健在が、応募作品に生き生きと表現され、この業界の未来を語る基礎のひとつを見る思いがしてなりません。業界外からビルメンを見る目も、その職業意識に強い感動を覚えていることが分かります。きつい仕事、汚い仕事を、「ビルメンのおばちゃん」たちが、事も無げにこなしていることに強い感動を覚えているのであります。どうして平気なのか、それは綺麗にすることがどんな人の心の中にも気持ちよさを呼び覚ましていく共感を知っているからであり、それを職業にしているからだと思われまます。

山脇雅之氏の『ふたば物語～心温まる4つのストーリー～』は、ビルメンの職業意識を鮮明に描き出した秀作だと考えられます。また、入選は果たせませんでした。長田智之氏の『みさえさんと私』は、その象徴的作品とすることができます。「おばちゃん」たちの高い職業意識こそが、周りを感動に包むのです。我が国における45歳から64歳までの女性就業者数は約1千万人とされています。そのうち清掃職に従事する女性は35

万人、調理人66万人に次ぐ数字だそうです(中島隆信『オバサンの経済学』東洋経済新報社)。この年齢層の女性にとっても、またビルメンテナンス企業にとっても、清掃は格好の職場になっており、その高い職業意識がビルメンテナンスの職場を支えていることは間違いのない事実だと思います。

このような「おばちゃん」たちの職場に、少々引きこもりがちで、おとなしそうな若者たちが入ってきていることを、大西賢氏の創作『たこ焼き』が表現してくれています。主人公の若者がビルメンの職場に定着してくれるのか、『たこ焼き』物語の進行にハラハラ、ドキドキさせられてしまいます。「おばちゃん」たちの強い職業意識に支えられた逞しさと、職場の仲間目を気にしながら何とかうまくやっけていこうとする心優しい若者たちとの取り合わせは、ビルメン職場の今後を見るような思いに駆られます。

加藤開人氏の『新人警備員の困惑』では、自ら警備に当たるビルに浮かび上がるクリスマスツリーのウィンドーアートとそれを見上げる警備員の姿は、ビルメンに働く者のさわやかさ、潔さを感じさせますし、同じ警備員を題材とした清山良一氏の『偽りのエアーメール』は、仕事の枠を踏み外す懸念を抱きながらも、湯たんぼのような心の交流を感じさせてくれる作品でした。河島健介氏の『改めて21世紀を認識、その上で』はビル機械を扱う職業への憧れを描いていますが、「最近では設備管理の魅力に気がつき始めている。設備が壊れる前に手を打つのがプロ」の件は、加藤氏が「変わったところを探すのではなく、何も変わっていないことを確認する」と警備の仕事表現した部分と共通するものです。事が起こってから対処するのではなく、普通に当たり前に、日常何も起こらない状態をキープするビルメンテナンスの管理の真骨頂を見事に捉えた表現だと賞賛せずにはおれません。

今回のビルメンテナンス誌500号記念作品募集は、特に働く人たちの意識を探るにはたいへん貴重な作品を多くいただくことができました。機会があれば、賞とは関係なく紹介してみたいと思うところでもあります。多くの示唆をいただいた56編の作品群に深く感謝を申し上げます。